

琉球大学学術リポジトリ

田芋栽培の地域的展開 3. 喜界島の田芋栽培

メタデータ	言語: 出版者: 沖縄農業研究会 公開日: 2009-01-29 キーワード (Ja): 田芋, 栽培調査, 喜界島, 背景, 北限, 伝統的作物, 湧水 キーワード (En): 作成者: 外間, 数男, Hokama, Kazuo メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002015665

田芋栽培の地域的展開

3. 喜界島の田芋栽培

外間 数男

(沖縄県農業試験場名護支場)

Kazuo HOKAMA :

Regional development of taro cultivation in the paddy field.

3. Taro cultivation in Kikai island.

はじめに

喜界島は奄美大島の東、約24kmに位置し、沖縄本島北端の辺戸岬からは約230kmの距離にある。同島は、道之島東海上を交易ルートにする上で重要な中継地であり、沖縄島東海岸を拠点とした按司にとって北との交易、文化流入の門戸であった。喜界島は1466年に第一尚氏尚徳に征討されるが、それ以前から勝連按司の支配下にあった(喜界町誌, 2000)。琉球王国への服属は島津氏侵攻の1609年まで続き、その間琉球との往来は激しく、年中行事や生活習慣など共通の文化的基盤が築かれていった(拵, 1990, 輝, 2004)。

サツマイモの伝来する前の喜界島は、田芋が重要な食料であった(喜界町誌, 2000; 名瀬市誌, 1968)。サツマイモ伝来後は田芋が主食の座から追い出され、稲作重視のなかで田芋田は水稲に代わっていった(前利, 2004)。しかし1745年の換糖上納令後は、田から水稲がはじき出され、サトウキビに置き換わってくる(喜界町誌, 2000; 前利, 2004)。水田の畑地化は田芋栽培を排水不良地に追いやり、衰退へ導くことになったと思われる。

現在、奄美諸島のなかで田芋栽培が根強く残っ

ているのは沖永良部島と喜界島である(下野, 1980)。沖永良部島は、田芋を1月16日の墓正月に供え、湧水を利用することが栽培を存続させる大きな理由であった(外間, 2003)。また奄美大島では放棄田の出現と祝事利用が田芋を蘇らせたが、栽培面積は0.5ha以下にすぎない(外間, 2004)。田芋は、喜界島でも正月や3月3日の節句にウムムッチー(田芋)がつくられ、伝統食材として欠かせないものである(橋本, 2002; 拵, 1990; 斉藤・坂口, 1972; 盛山, 1993)。

喜界島は、田芋栽培にとって北限に近く、また湧水地以外水利に恵まれないドライな島である。水田栽培を基本とする田芋は、掛け流し栽培で安定した収量が得られるが、水利に恵まれない地域では、栽培が難しく、また不安定にならざるをえない。そこでドライな島における田芋栽培の現状を調査し、自然環境や歴史・文化などとの関連で栽培の存立条件を明らかにした。

なお調査は2003年12月に行った。調査に当たっては農家や役場職員に協力をいただいたので感謝の意を表す。

自然および社会的条件

1) 地勢

喜界島は、周囲50.0km、面積56.9km²である。島は台地状をなし、北東から南西に長く、最北のトンビ崎から南端のシツル崎までは約14km、東西の最大幅は7.7kmである。島の基盤は島尻層からなり、その上部を数十mの厚さで第四期琉球石灰岩がおおう。島尻層は、青灰色の泥岩や泥灰岩、シルト岩を基盤とする不透水性であり、琉球石灰岩の断層崖に沿って帯状に露出する(古川, 1981; 佐藤, 1959; 武永, 1968)。

島は3段の段丘からなる。上位段丘は、最高点の百之台224mを頂点として200m前後に北東から南西に伸び、その東側は急崖がはしり、海岸に迫る。また西側は120~180mの中位段丘が広がり、その下に40~80mの下位段丘が続く。また下位段丘の崖下と海岸線との間には、隆起サンゴ礁が島を囲むかたちで分布し、平地が形成されている。各段丘の境は崖をなし、雑木林でおおわれ、崖下からは地下水が湧出する。湧水は集落を形成する大きな条件である(古川, 1981; 佐藤, 1959; 武永, 1968)。

湧水は、島内に100ヶ所近く分布し、百之台東側の島尻層の露出する急崖部と西側の川嶺崖から城久、滝川、大朝戸、長峰に至る線上、及び南側の浦原、上嘉鉄、島の北東の小野津に多く分布する(武永, 1968)。湧水量は降雨や季節で増減するが、渇水期の湧出量は10,000~15,000m³/日に達すると推測されている(古川, 1981)。しかし、夏期干ばつ時には百之台東縁部や小野津、志戸桶では涸れることもあった(武永, 1968)。

2) 気象

喜界島の年平均気温は22.0℃(2001~2002年

平均)であり、奄美大島(名瀬)より0.5℃高く、那覇より0.7℃低い。また年間降水量は1,843mm(1979年~2000年)と、奄美諸島の中では与論島に次いで少ない地域である。

3) 社会的条件

現在35集落の人口は9,041人(2000年)である。1955年の16,037人に比べて7,000人近くが減少し、45年間の減少率は43.6%となっている。しかし1920年代には過去最高の21,858人に達し、1935年まで20,000人以上で推移していた。1948年には、再び20,014人に達したが、その後は減少傾向が続き、現在過疎地域となっている。

年齢別人口構成をみると、15歳未満は1,487人で全体の16.4%を占め、15歳から64歳までの生産年齢は4,671人(51.7%)であるが、65歳以上は2,883人、31.9%と高齢化の著しい地域である。

2000年度の総就業者数は4,093人である。そのうち農業従事者は996人(24.3%)と業種別では最大である。次いでサービス業の875人(21.4%)、卸・小売飲食店が718人(17.5%)、建設業の624人(15.2%)となっている。第1次産業のほとんどは農業従事者が占める。

土地利用と農業生産

喜界島の耕地面積(表1)は2,120haであり、総面積の37.3%を占め、与論島、沖永良部島に次いで耕地率が高い。耕地の全ては畑地であるが、普通畑が2,000ha、樹園地は36ha、牧草地など、その他が84haとなっている。田は統計的にゼロであるが、浦原や花良治では小規模田を多数みることができる。1960年には、田が253ha(13.3%)もあり、湧水や天水を利用した水稻栽培が行われ、自給的色彩の強い農業形

表1 喜界島における土地利用状況¹⁾.

年	耕地面積	田	普通畑	樹園	その他
1960	1,907	253	1,654	-	-
1965	1,772	174	1,597	-	1
1975	1,452	24	1,382	3	43
1985	1,858	1	1,824	4	29
1995	1,707	1	1,652	15	39
2002 ²⁾	2,120	0	2,000	36	84

- 1) 1965年, 1975年, 1985年, 1995年農業センサス
(鹿児島県統計書 1967, 1976, 1986, 1996)
2) 鹿児島県大島支庁：奄美群島の概況 (平成15年度)

態であった。

1戸当たり耕地面積は268.4aであり、奄美諸島のなかでは最大である。3ha以上の農家数は209戸で全体の27%を占め、規模の大きい農業が行われている。しかし1960年の1戸当たり耕地面積は約60aと狭く、50a以下の零細農家数は全農家の49%を占めていた。1965年から開始された圃場の基盤整備事業は、50a未満の零細農家を減少させ、その反面3ha以上の大規模農家は大幅に増加することになり、専業農家割合を高める結果となった。

作物別の栽培面積は(表2)、サトウキビが1,723haと最も大きく、全体の81%を占め、次

いで飼料作物の185.2ha(8.7%)であり、この2品目で全体の90%近くに達する。サトウキビと畜産に特化した地域といえる。畜産では肉用牛のウエイトが高いが、山羊が徳之島、奄美大島に次いで多い。

農畜産物の粗生産額(表2)は2,170百万円である。サトウキビは1,377百万円で全体の63.4%を占め、次いで肉用牛の326百万円(15.0%)となり、2品目で全体の80%近くを占める。また花きは233百万円であるが、ほとんどをキクで占め、野菜ではメロン、カボチャが主要品目となっている。田イモの生産は、統計に現れず、面積及び生産額も不明である。

表2 喜界島における畑作物の収穫面積と粗生産額¹⁾. (ha・百万円)

種類	面積	生産額
カンショ	3.0	2
落花生	1.0	1
サトウキビ	1,723.0	1,377
野菜	18.7	124
花き	21.0	233
果樹	26.2	63
その他	185.2	370
合計	1,978.1	2,170

- 1) 鹿児島県大島支庁：奄美群島の概況 (平成15年度)

田芋の栽培地

喜界島の田芋栽培については、斉藤・坂口(1972)によって詳しく報告されている。田芋田は百之台段丘崖下の湧水地域に分布し、1a程度の小規模田が多く、帯状に分布することはなかったという。調査は1972年に行われており、30年前の喜界島における田芋栽培を知ることができる。

今回の調査でも田芋は、斉藤・坂口(1972)の報告とほぼ同じ場所で栽培されていた(図1)。

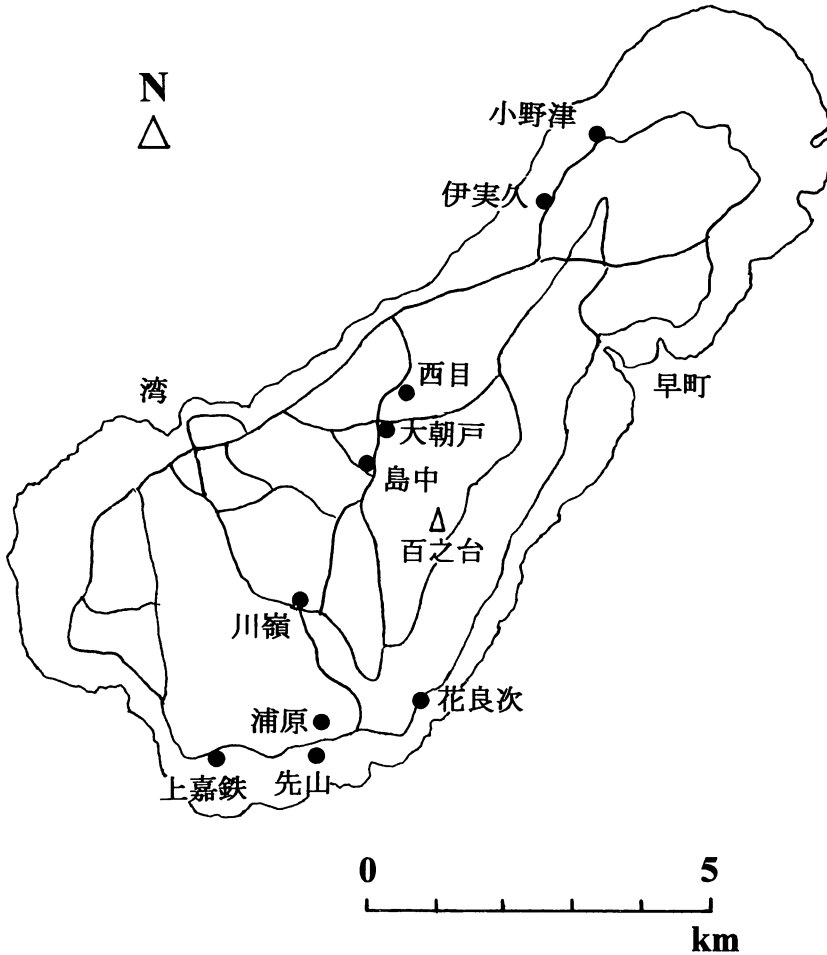


図1 喜界島における田芋の調査地点。

田芋は伊実久から西目、大朝戸、島中、川嶺、浦原を結ぶゆるやかな曲線に沿って分布し、また上嘉鉄や先山、蒲生、嘉鈍、佐手久、志戸桶、小野津にも小規模の栽培があったと報告している（斉藤・坂口，1972）。しかし今回、蒲生や嘉鈍、佐手久、志戸桶には分布が確認されなかった。これらの地域は、百之台段丘崖下の湧水地域の外縁部に位置し、水利に恵まれていないことが、田芋栽培を存続させえなかった理由と思われる。

田芋栽培の最大の産地は浦原である（写真1）。



写真1 集落前に広がる田芋田（喜界町浦原）。

同地は百之台の南側段丘崖下の下位段丘に位置し、水量が豊富である点で他を圧倒する。北風が遮られることも田芋栽培にとって有利に展開できる条件になったと思われる。また浦原では、基盤整備事業後に各戸100㎡の田芋田が確保されたことも、現在まで大規模に残った理由として挙げられる。現在、同地では10戸の農家が田芋を栽培し、隣接する先山の農家10戸も併せて栽培が行われ、約65 a（表3）の田芋団地が形成されている。先山集落内には、数㎡単位に区画された小規模田での栽培がみられた。1筆を細分し畦を立て田にしたものである。

表3 田芋の栽培面積

			a
調査場所	筆数	面積	
上 嘉 鉄	7	2.2	
浦 原	77	64.9	
先 山	20	12.0	
川 嶺	54	13.4	
島 中	10	4.9	
大 朝 戸	16	14.7	
西 目	3	5.9	
伊 実 久	1	0.2	
小 野 津	1	0.1	
花 良 次	32	14.6	
計	221	132.9	

また川嶺は標高80mの中位段丘に位置し、水稻の灌漑用に建設された川嶺ダムの下に田芋田が広がることから、水利には恵まれている。田芋田は集落近くに分布し、浦原に次いで規模の大きい地域である。斉藤・坂口（1972）は、田芋田がサトウキビ栽培のできない排水不良の湿地帯にあり、湧水の流水域で栽培され、約1haの栽培があったと報告している。現在、田芋面積は13aであり30年前の1/5程度にすぎない。田芋田はすべて小規模であり、菜園が混在し、畦立てなしの掘り込み式の田が一部にあり、畑

地からの転換であった。

大朝戸は喜界島有数の水田地帯であり、稲作地域であった。田芋は水稻わきに小規模に植えられ、独立した田芋田はなく、ほとんどの水田農家で栽培されていたという（斉藤・坂口、1972）。現在、稲をみることはなく、田芋田も集落から山際に追いやられ、農耕地の大部分はサトウキビが占めている。今回の調査では11筆の田芋田を確認したが、すべて百之台の崖下近くに位置し、棚田状にあった。湧水から水路で導水された水量は豊富にあり、自然落差を利用して流れ留まることがなかった。現在10戸約15aで田芋が栽培されている。

島中では、湧水の流れ込む水路沿いに数筆の田芋田があった。湧水側にはアシが繁り、その対面にはキビ畑が広がっていた。湧水からの水は、豊富にあったが流れが悪く、滞水状態にあった。また西目では、集落西側の基盤整備済みの畑地に、掘り込み式の田が造られ田芋が栽培されていた。田は、中位段丘の底部に位置することから、畑を水田状態にすることは容易である。その周囲にはサトウキビ畑が広がり、田が異質の存在として写った。

伊実久は中位段丘の外縁部に位置し、その崖下には小規模の田芋田があった。田の水は湧水に依存していたが、水保ちが悪く、表面水がなかった。また田の畦はビニールシートで防水されていたが、漏水は底面から起こっていると思われた。小野津は下位段丘に位置し、田芋田は崖下の排水路沿いにあったが、水利に恵まれず、また保水力のない基盤であることから表面水はなかった。周囲はサトウキビ畑が広がり、辛うじて田芋田が維持されている状態であり、消滅することも時間の問題と思われた。

上嘉鉄は、梅雨時期になると湧き水が流れ込むことから下水流（しつる）といわれ、志津る

村とも呼ばれていた（盛山，1993）。田芋田は湧水のある崖下の窪地にあったが、水量が豊富であるにもかかわらず、排水が悪いことで注水が控えられ、水が滲み水面下には藻が発生していた。田芋田は湿地帯にあることから周囲は利用されず、アシやスキが繁っていた。その一角には、排水溝を回らせた陸畑が菜園として利用され、排水溝には田芋が植えられていた（写真2）。

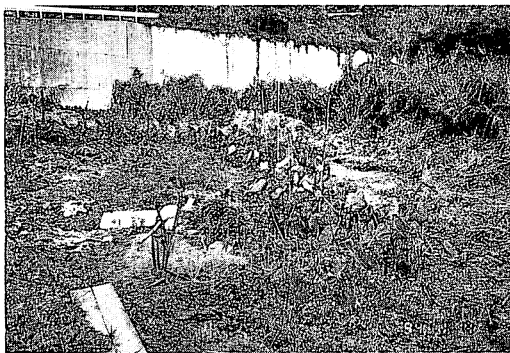


写真2 排水不良地に植えられた田芋（喜界町上嘉鉄）。

花良次は、百之台東側の急勾配の崖下に海岸線に沿って位置する。田芋田は崖の直下に不整形の小規模田が数段造られ、所々に未風化の石灰岩が露出していた。田は水保ちが悪く、豊富な湧水が掛け流しにしなければ保てないと思われた。周囲は雑木林に接し、眼下に集落が見渡せ、その間にサトウキビ畑がひろがっている。田は集落から離れ、雑木林のなかの岩場にあることから、農耕地としては最適といえない（写真3）。また基盤整備するには平坦面が狭く、利用価値の低いことも、田芋田の維持につながったと思われる。

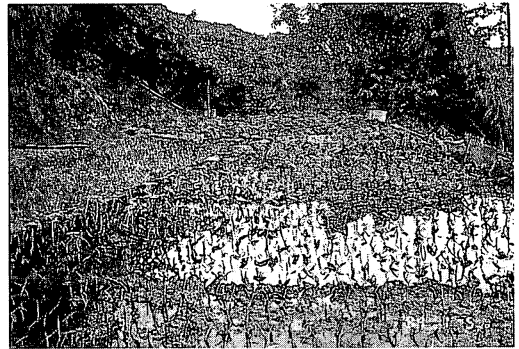


写真3 山間に造成された田芋田（喜界町花良次）。

田芋栽培の技術構造

1) 現地調査

田芋栽培の技術構造を明らかにするため現地調査を行った。調査は、現地における栽培の実態や生産者、役場、農協職員などからの聞き取りで行い、併せて技術構造とした。

2) 品種と作型

喜界島では、赤茎系及び白茎系の2系統が確認された（写真4）。系統別の栽培割合は不明であるが、赤茎系の割合が高かった。赤茎系は白茎系より粘りがあり、美味しいことが選定の理由であった。しかし圃場では両者の混植も確認され、大朝戸では白茎系が栽培されていたことから、品種、系統に対する強い認識はないと思われた。

植え付け時期は、利用の多い正月や3月3日であることから、その前後の12月から3月にかけてになる。また夏期に植える場合もあり、需要に併せて植え付け時期が決められていた。



写真4 田芋の栽培系統・赤茎系(左)と白茎系(右). 赤茎系の葉柄基部及び根は赤褐色, 白茎系は白色 (喜界町浦原).

3) 耕起及び植付

田芋の産地である浦原や大朝戸では耕起に小型の農業機械が用いられる場合もあったが、ほとんどが小規模田であることから手作業によることが多い。

植付けには親芋及び子芋が用いられ、親芋を用いる場合が多かった。植え付けは水平面に苗を挿し込むだけであるが、畦立ての溝に植え付け、培土を行う場合もあった。

表4 田芋の栽植距離.

栽植距離 cm	筆数
15×15	9
15×20	8
20×20	5
20×30	4
不整一	26

栽植距離は表4に示すとおり一定でなかった。株間・畝間は15cmから30cmまでであったが、ほとんど間隔を決めることなくランダムに配置されていた(写真5)。表4は、栽植距離ごとの



写真5 ランダムに植えられた田芋 (喜界町花良次).

調査圃場数を示してあるが、定規をあてることなく植え付けされることから不正確であることは否めない。沖縄の栽培基準に比べて超密植である。生育期間の短い北限域では、生産量を個数で確保する必然性から採られたものと思われる(外間, 2004)。

また浦原では捲縄を引っ張り揃えて植える場合もあったが、並びをよくするだけであり、間隔は適当に決められていた。

4) 施肥

基肥は堆肥や鶏糞、化学肥料などが用いられるが、一部では無施用もあった。堆肥は市販品が使用されていたが、野菜などの残渣物をすき込むこともあった。また古くはガジュマルが緑肥として用いられている(斉藤・坂口, 1972, 橋本, 2002)。化学肥料は、さとうきび880号(18-8-10)やくみあい隣加隣安5号(11-14-16)などサトウキビ用やイモ用の配合肥料が用いられ、追肥は2から3回程度行われていた。追肥時期は一定でなかったが、植え付け後1~2ヶ月、4~5ヶ月頃に行い、落水後に施用することもあった。また植付け後は手入れすることなく、わずかに鶏糞を入れる程度である(斉藤・坂口, 1972)というが、今回の調査からは追肥や除草など管理が十分なされていることがうか

がわれた。

5) 管理

川嶺や浦原、先山では農業用ダムから導水管敷設で灌漑が行われていたが、上嘉鉄や花良次、島中、大朝戸では湧水池から直接導水し用いられていた。湧水池に近い田は掛け流しもみられたが、基盤整備地域では水保ちが悪く、注水を断つことで乾田化することが容易であった。

6) 病虫害防除

上嘉鉄では、葉裏面にアブラムシの群生した株が幾つかみられ、またタロイモウンカの吸汁痕が葉柄に確認された。疫病は上嘉鉄や浦原で確認されたが、程度は低かった。浦原ではイッポンセスジズメやイナゴモドキなど食葉性昆虫に対し農薬散布が行われていた。

田芋は連作することで芋腐敗を生じやすい。特に水が澱むと腐敗を助長するが、中干しなど通気を良くすることで改善される場合がある。喜界島でも中干しを行う場合があった。また1年間休閑することもあるが放任状態であり、一部で畑地化し野菜などが栽培されることもあった。

7) 収穫調整

田芋は正月および3月3日の節句が必要の多い時期であり、その間が収穫時期になる。芋の掘り取りは、落水後に鍬やショベルで行われていたが、木の枝を掘り棒にして収穫する農家もあった。

掘り起こした芋は土塊や根を取り除き、芋と葉柄部が切断される。切断は芋と葉柄の境目からなるが、切断面から芋腐敗や苗の良否が判断され選別される(写真6)。

収穫後は持ち帰り、煮炊きしたあと店頭で並



写真6 収穫調整後の田芋の苗(喜界町浦原)。

べられる。調査時には店頭で生芋をみることはなかった。販売用の芋はMサイズ100g前後が多く、店頭販売価格は3個入りパック包装で90~100円/100gであった。

田芋栽培の社会的背景

奄美大島の正月はサンゴン料理から始まり、料理にコーシャ(山芋)は欠かせないが、喜界島では用いられない(登山, 2000)。喜界島では田芋が正月や3月3日の節句、家族の命日には欠かせない食材となる(斉藤・坂口, 1972)。川嶺では盆・正月の供え物とするが、手久津久では夏の野菜端境期に茎を食べ、3月3日にはターウム餅を供え、また坂嶺では野菜としての関心しかなかった(和田, 1982)など地域によって田芋の役割は異なるが、行事や節目、季節の食材として欠かせない存在である。

今回の調査は正月前後であったが、スーパーには田芋が店頭で並べられていた。価格は里芋の2倍以上と高価であったが、売れ筋は堅調であった。田芋が高価な食材であっても、正月など行事に欠かせないものであることがわかる。また田芋は、正月になると季節の便りとして親戚、知人に送付され、故郷の懐かしい味として喜ばれている。田芋に対する根強い愛着を示す

ものである。

喜界島では、田芋をウムムッチーやウムデンガクとして食される。ウムムッチーは、田芋に黒砂糖と塩を混ぜて臼で搗き、はったい粉をまぶせ、丸めたものである（斉藤・坂口、1972）。田芋をウムムッチーやウムデンガクにするのは、沖永良部島や沖縄でもみられる。また正月に供え、食されることは沖縄との文化的共通性をもつものである。

おわりに

喜界島は典型的な低島であり、水利のほとんどを地下水に依存している。島の中央東には、南北に延びる百之台を頂点とし、そこから数段の段丘が海岸線まで続く。段丘の崖下からは地下水が湧出し、集落が形成され田が造られた。現在、田は統計上皆無であるが、湧水地を中心として簡易造成の田が数ヶ所で見られ、田芋が作られていた。

1960年代の喜界島は、水田面積が253haと全耕地の13%を占め、自給的色彩の強い農業形態であった。しかし1975年には水田面積が24haに急減する。1972年に喜界島の田芋を調査した斉藤・坂口（1972）は、田芋が島のほぼ全域に分布し、湧水地に集中することを報告している。当時水田面積は36haで、そのうち田芋田が3haを占めているが、1955年以前は水田面積のかなり割合を田芋が占めていたのではと示唆している。田芋栽培は伝統的自給作物への強い愛着の現れであるという。しかし田芋はサトウキビの生産拡大や現金収入の増大に伴い自給作物に対する依存度の低下で減少してきた（斉藤・坂口、1972）。その後水稻の生産調整や基盤整備によって田は急速に減少していったが、田芋栽培は根強い愛着に支えられ、豊富な湧水と簡

易田の造成で消滅を免れてきたと思われる。

今回の調査から、田芋の栽培面積は1.3haと推定したが、1972年の斉藤・坂口の調査に比べほぼ半分以下である。現在、水田は統計上全くみられず、また基盤整備で排水不良地や岩盤地域までも畑地化したが、田芋田が1.3haも残存していることは奇異に値する。そのほとんどは畑地を簡易田にしたものであり、基盤整備されずに残されたところであった。また生産者は高齢者が多く、小規模栽培であり自給を目的としているが、親類縁者への贈答や販売もあった。年末年始の店頭には、田芋が里芋の倍以上に価格設定されていたが、高価格であるにもかかわらず需要のあることは、田芋が今なお根強く生活にとけ込んでいることを示している。

現在田芋が栽培されている地域は、大朝戸や島中、川嶺、蒲原、花良次、上嘉鉄など、典型的な湧水地帯である。これらの地域は豊富な湧水を利用した稲作が古くから行われていたが、サトウキビの生産拡大に伴い、水稻は消滅していった。1972年の斉藤・坂口の調査では、大朝戸と板嶺、伊砂に稲作地帯が広がり、水稻田の片隅で田芋が栽培されている。また川嶺や蒲原、島中、伊実久、志戸桶には規模の大きな田芋田が分布することを報告している。これらの地域では、田のほとんどが田芋であったという。現在、田芋栽培は、蒲原が最も多く全面積の50%近くを占め、大朝戸と花良次、川嶺がそれぞれ約10%を占めている。いずれの地域も典型的な湧水地帯である。板嶺、伊砂、伊実久、志戸桶などの水田地帯は、湧水源から遠く離れており水利に恵まれないことから田のほとんどが畑地化されサトウキビ畑に代わっていった。喜界島はサトウキビを中心とした大規模で機械化の進んだ地域である。基盤整備はサトウキビの単作化に弾みをつけたが、田芋田や家庭菜園など小

規模田畑の消滅に拍車をかけることになった。しかし浦原では基盤整備時に田芋田が確保され、また大朝戸や川嶺、花良次、上嘉鉄などでは、傾斜地や窪地、岩盤地域などが基盤整備されずに残され、そのことが田芋栽培の残存につながったと思われる。

喜界島は、琉球、藩政時代から自然災害や疫病などで数度となく飢饉に見舞われ、その都度薩摩、琉球から借米を受けていた（喜界島誌、2000）。当時、主食はサツマイモであったが、農地の大部分がサトウキビであり、また山野の少ないことは野生植物を食料源とすることが厳しく、そのため飢饉時の食料確保は至難の業であった（喜界島誌、2000）。そのなかで田芋は、排水不良の窪地や山間地の湿地帯などサトウキビや水稻栽培の困難な場所で栽培が続けられ、飢饉時の救荒食として、また冬期食料の乏しい時期には貴重な食材を提供したと考えられる。緊急時に大きな力を発揮したことが、栽培を継続する理由の一つと思われる。

第一尚氏尚徳による喜界島遠征は長年月を費やして成就されるが、抵抗の中心勢力は勝連按司の配下がかかわったものと考えられている（喜界島誌、2000）。また島津氏侵攻後は奄美諸島が直轄地となったが、琉球文化を藩政の妨げにならない範囲で維持していた（喜界島誌、2000）。しかしサトウキビの生産上不都合な慣習については撤廃し、苛酷な労働が強いられていたという（拵、1990；松下・下野、2002；前利、2004；輝、2004）。藩政時代の苛酷な労働に比べ、琉球王国時代は宗教的統治を基本とするものであり、重税を課すことなく、むしろ善政であったという（拵、1990）。藩政時代の苛酷な状況のなかで心の拠り所としての琉球文化があったと思われる。年中行事など共通の文化をみることができ、またノロの辞令書などが現

在に受け継がれてきたことから示唆することができる。田芋はハレの食材として利用されているが、いつから用いられたかは不明である。沖縄で利用され始めた後に速やかに伝わった考えられる。田芋は琉球文化の外縁部で文化の拠り所として滅びることなく現在に至ったものと思われる。

喜界島の田芋栽培は自給を主目的とされ、また高齢者による栽培であることから技術的には未確立である。栽植法は沖縄と変わらないが、栽植距離は表4に示すとおり不整一であり、また超密植栽培である。奄美大島など田芋栽培の北限域では、疎植より密植による栽培が不利条件を克服するうえで最良の選択であることを報告した（外間、2004）。浦原ではけん縄を引っ張って植え付けされていたが、区画を齊一にするだけで、栽植距離はランダムであり、適当に配置されているにすぎなかった。斉藤・坂口（1972）は、植付け後手入れすることなく、鶏糞をわずかに入れる程度であると報告しているが、今回の調査では有機質資材や化学肥料が施され、除草や病害虫防除なども行われていた。田芋の収穫が落水後にショベルを用いて掘り取られることは沖永良部島や奄美大島と同じであったが、沖縄ではほとんどなされていない。しかし密植で子芋数が多く、小型芋を収穫するには落水後に一斉収穫した方が良いかもしれない。喜界島の田芋栽培は、伝統農法を知るうえで貴重な情報を提供している。田芋の栽培は湧水地で行われ、排水不良地では陸畑と排水溝を利用して栽培され、簡易に田にすることは湧水地の効果的な利用法を今に伝えている。喜界島などドライな島では、水稻で安定した生産体系を望むことはできないが、湧水を上手く活用した農業形態が田芋栽培である。そのことが田芋栽培を現在に継承する要因の一つと考えられる。

喜界島はサトウキビ単作経営の著しく進んだ地域であり、全面積の約80%をサトウキビが占めている。1戸当たり耕地面積は奄美群島のなかで最大であり、規模の大きな農業経営が行われている。しかし65歳以上の高齢者は約32%に達し、奄美群島では宇検村に次いで高く、大規模経営をどう維持するかが今後の大きな課題である。また田芋生産者は高齢者が多く、今後の維持も危惧されるが、田芋が生活に根強くとけ込んでいるなら、継続されるであろう。しかし伝統文化が衰退するなかで、いつまで維持されるかは未知数である。

引用文献

- 古川博恭 1981. 九州・沖縄の地下水. 九州大学出版会.
- 橋本征治 2002. 海を渡ったタロイモーオセアニア・南西諸島の農耕文化－. 関西大学出版部 87-148.
- 外間数男 2003. 田芋栽培の地域的展開 1. 喜界島および沖永良部島の田芋栽培. 沖縄農業 37: 3-20.
- 外間数男 2004. 田芋栽培の地域的展開 2. 奄美大島および徳之島の田芋栽培. 沖縄農業 38: 59-73.
- 喜界町誌編纂委員会編 2000. 喜界町誌. 喜界町.
- 梶嘉一郎 1990. 喜界島風土記. 平凡社.
- 松下志朗・下野敏見 2002. 鹿児島県の湊と薩南諸島. 吉川弘文館.
- 前利 潔 2004. 農民体質と歴史的背景－大山麟五郎説を考える－. 鹿児島大学プロジェクト編「奄美と開発」. 南方新社（鹿児島）, 183-218.
- 盛山末吉 1993. しつる村物語. 高城書房出版（鹿児島）.
- 名瀬市誌編纂委員会編 1968. 名瀬市誌. 名瀬市役所.
- 斉藤 毅・坂口 彰 1972. 喜界島のミズイモ栽培に関する文化地理的考察. 鹿児島地理学会紀要第20巻第1号 75-85.
- 佐藤 久 1959. 奄美諸島の地形. 九学会連合奄美大島共同調査委員会編, 奄美（自然・文化・社会）39-53. 日本学術振興会.
- 下野敏見 1980. 南西諸島の民俗 I. 法政大学出版社 38-65.
- 武永健一郎 1968. 喜界島の地形・地質. 奄美群島自然公園予定地基本調査書. 鹿児島県教育委員会 263-296.
- 登山 修 2000. 奄美民俗雑話. 春苑堂書店（鹿児島市）.
- 輝 博元 2004. 喜界島のあゆみ. 松本泰文・田畑千秋編「奄美・復帰50年」. 至文堂 299-307.
- 和田正洲 1982. 奄美諸島の農耕技術伝承. 九学会連合奄美調査委員会編「奄美－自然・文化・社会－」. 弘文堂, 103-111.